

紀州田辺領における芸能興行について

竹 下 喜 久 男

はじめに

近世和歌山城下とその周辺における芸能の展開を明らかにするに際して、もっとも基本的な作業が土田衛⁽¹⁾、西岡直樹⁽²⁾両氏によりすすめられ、近年発表された。両氏の作業は元禄期を中心とし、藩主周辺の公私に渉る記録から芸能に関する事項を抽出、整理し、元禄期の城下とその周辺の状況を一覽可能にただけでなく、今後紀州における芸能史研究を時間的、地域的に調査、研究を広げることを促す点で貴重である。両氏が史料として用いられた紀州藩家老三浦家文書のうち、石橋生庵の記す三浦家家譜『家乗』も影印公刊され、まさに紀州の芸能史研究がその緒にいた感がある。

紀州田辺領に関する史料として『万代記』、『田辺町大帳』が現存していることは夙に知られている。いうまでもなく『万代記』（文明三年～天保十年）は田辺組大庄屋田所氏が大庄屋の職務に関わる記録を留めたもの、『田辺町大帳』（天正十三年～慶応二年）は町会所の記録である。右の二つの膨大な記録の中には、田辺町在の人々が日常的に

関わったと考えられる芸能に関する史料を多く含んでいる。そこには社寺の祭礼、開帳に際して興行されるものよりも、むしろ町方の景況振興、社寺の修復費助成という人々の日常生活に切実に関わる要素を濃く含んだ興行が多いことに気が付く。

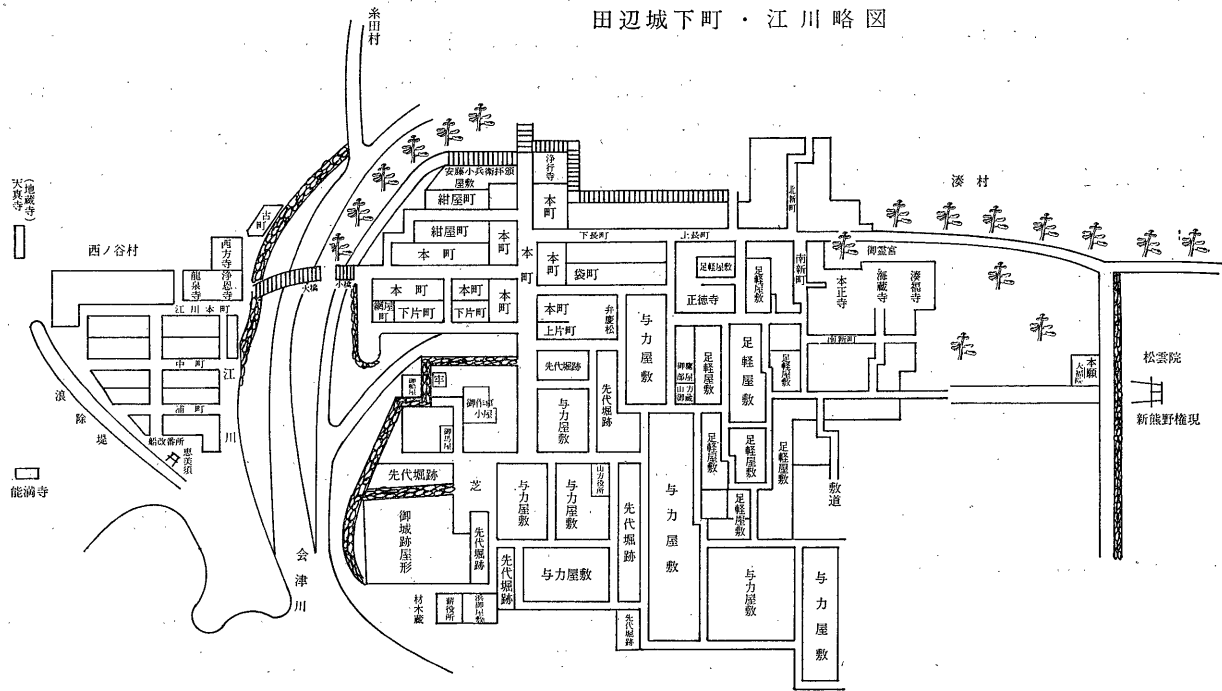
小稿では『万代記』、『田辺町大帳』を用いて、主として近世後期の田辺町在における芸能興行が、①田辺領の総産土神としての新熊野権現社の維持、修復、②経済的に零細な不安定層を多く抱える紺屋町、江川浦の景況振興、③檀家の経済力に多く依存できない寺院の修復助成、以上の三点に如何に関わっていたかについて考察したい。

少なくとも近世の地方都市における芸能興行が娯楽を提供するという点からだけでなく、その地域の経済的特質と深い関わりをもって企てられていることを、紀州田辺の町在において検証しようとするものである。⁸⁾

享保期の田辺領

浅野長晟が安芸に移封された後、徳川家康の第十子頼宣が駿遠の地から紀伊一国と伊勢松坂を合せ五万五千石の地に封じられたのは元和五年（一六一九）であった。その際遠州掛川にあった安藤帯刀直次は紀伊牟婁郡田辺に移され、三万三千八百石を領し、遠州浜松の水野出雲守重央は紀伊新宮三万五千石の地に移された。安藤、水野両氏は若年頼宣の御付家老として配され、代々と歌山に居住した。田辺には安藤直次の一族安藤小兵衛直隆が城代家老として領内を預かった。田辺領は大庄屋組一〇組に分ち、田辺組は田辺城下周辺の村々からなり、田所氏が田辺組の大庄屋と田辺町・江川の大年寄を兼ねていた。

田辺城下町・江川略図



享保12年8月以降の作成と考えられている絵図を参考にした。
与力屋敷には屋敷毎に人名があるが省略した。

天保八年（一八三七）仁井田好古が編んだ『紀伊続風土記』において、田辺周辺の地形の特色を「此庄の海崖皆沙土にして、其地平坦なり、皆古の海中或は遠干潟の地なり、中に就きて、湊村城下の地は皆古の海中にて、大抵今の秋津庄、万呂庄と接する地、古秋津川の海口にて、浪打際の地なるへし」と述べているが、近世を通じて、しばしばこの地を襲った洪水と地震による津波の被害は、この地形と無関係ではないであろう。

延宝三、四年（一六七五、七六）の飢饉と疫病、宝永四年（一七〇七）十月の大地震と続く津波は田辺町・江川に潰滅的打撃を与えその被害は前代未聞とされた。⁴⁾この期の町の復興に際して周辺農村からの小前層の入り込みが大量にあり、彼らがやがて経済的に不安定で流動的な日用、仲仕層として町方の住民となったであろうと考えられる。享保八十二年（一七二三～二七）にかけ「近年世上就困窮、町表商売無数、職人共細工等無之様ニ相聞へ候、其上八木下直ニ在之」⁵⁾とされた不況は、零細な商工業者の生活をおびやかした。享保十四年を遠く下ることのない記録とされている『享保十年 田辺諸事控』中の「町・江川諸職人諸商売」（表Ⅰ）では一見して漁師、日用、仲仕が全体の五〇%を占め、他所奉公人、他所稼を合せば六〇%は流動性の高い社会層であることがわかる。享保十七年の飢饉は事態を一層深刻化することになった。

享保十七年八月十二日米相場新米銀八五匁であったのが、五日後の十七日には二五〇匁と三倍に急騰する異常な動きがみられた。これは上筋の商人が十二日当地に入り込み、手当り次第米を買請けたことによるとされた。一時的にせよこの急騰は町人を不安に陥れ、町大年寄らは町・江川五五三人、一日一人二合五匁、二日分として、米三〇石の飢扶持の手当をしている。この種の手当はなされたが、享保十七年八月から一年間に、町・江川で疱瘡、痢疾、食傷、熱病による死者は二一二人に及び、田辺領全体では「食物悪敷病死致候」者二、八六四人、「弱人ニ而御座候へ

表I 享保末期町・江川諸職人諸商売

町	本町	上長町	下長町	北新町	南新町	袋町	紺屋町	片町	江川	計
仲諸古質小魚酒請麴温縑紺匣鍛大船籠傘桶疊塗砥石左綿小仕屋大旅旅医漁他仲借	1	2							2	5
色仲				3		1				4
手	8	12	6	10		2				38
質	1	5	2	2						10
質商		2			1	2			3	8
酒						25			13	38
酒	5	4	1	2					2	14
麴				1					1	2
温	2	4	2	3						11
縑						2				2
紺	1			1					1	3
匣屋・指物	2		1	1		2	8	5	1	20
鍛	1				2	1	3	2		9
大				2	1		4			7
船	7			1	7	5	3	9	1	33
籠									1	1
傘	1									1
桶	1									1
疊					4			3		7
塗	1						1			3 ⁽¹⁾
砥	3		5		1	1		2		12
石	1					1		1		3
左								1		1
綿	1	1		2	2					6
小	3			2	6	2		1	2	16
仕					1	1				2
屋	1					1				2
大					2					2
旅			19							19
旅	6									6
医	4		2		1	3	2	1		13
漁								30		30 ⁽²⁾
他	5	3	3	6	12	4	1	4	13	227 ⁽³⁾
所	3		3	4	1	1	9	4	12	51 ⁽⁴⁾
奉	32	4	1	29	22	13	35	5	12	37
公人										153
稼	56	17	14	39	5	42	30	19	10	232

備考 本表は「享保十年田辺諸事控」(『くちくまの』54号 1983.2)により作成した。

注 (1)1名は町不明 (2)内15人地廻り、15人銚子行 (3)内84人地廻り、143人関東・上州・熊野行 (4)その他地廻り奉公人40人(男女共)

共食物惡、病死致候者共ニハ無之、食傷、熱病、疱瘡、霍乱、痢疾、瘡、疝氣、黃疸ニ而相果申候」者一、五八六人を数えている。⁶⁾ 後者にはわざわざ但し書きをしているが、大部分は食物の欠乏による栄養状態の極度の悪化が原因とみられ、結局大部分が飢餓による病死といえる。田辺領の全人口の一〇%強が一年間に餓死あるいは病死したことになる。

このようなとき、領主側は領内の景況浮揚の方策を広く領民に問うている。⁷⁾

一、近年町在之内ニも別而痛候所も有之趣ニ候、就夫、其所之潤ニも可成儀杯有之、願申出候ハ、其品可相達候、且亦由緒なと有之候百姓町人之内、当時逮困窮罷在候族、勝手之為ニも可成儀杯存附、是亦相願度存罷在候者ハ、無遠慮可申出候、其訳等吟味之上被仰付ニ而可有之候、此旨可被申聞候

一、御城下町人共之儀、近年音曲遊山等をも致遠慮趣ニ相聞候、猥成儀ハ有之間敷事ニ候へとも、遊山音曲等其外前々御国ニて致来候程之儀ハ遠慮ニ及間敷事ニ候条、此段も町方へ可被申聞候

所の潤いとなる策、個々の生業に勝手よき法、さらに願うところあれば申し出、十分吟味の上差図を与えること、また旧来許されていた興行については遠慮に及ばないとした。特に第二の条について、芸能興行が町民を活気づけ、景況浮揚に資するところがあるとする領主側の理解が、このような文言として表現されたものであろう。

享保末年の町在の危機的状況が、新熊野権現あるいは江川浦に限られていたそれまでの興行を、より広い町在の要求に広げて認めていくという、大きな政策転換の要因となったといえよう。

新熊野権現芝居

領主側の示した方向に沿って、一早く企てられたのは、享保十八年（一七三三）十二月願出た操芝居であった。この芝居は新熊野権現社大破修復の助成をするために、町・江川の氏子らが企てたものである。

新熊野権現（鶏合権現、闘鶏神社）は熊野別当湛快が平安末期熊野三所権現をこの地に勧請したとの伝えを有し、爾来この地方の総産土神として信仰を集めていた。和歌山藩主頼宣が瀬戸桔梗平の別邸に来遊した際、しばしば新熊野権現に参詣し、寛文九、十年（一六六九、七〇）の両度の参詣に際しては、社頭で演じられた歌舞伎や能を楽しんでいる。⁽⁸⁾ 田辺領主も祭礼には御供料を寄進し、参詣することもあった。

近世において新熊野権現本社の修復は原則として田辺領主、末社、摂社、鳥居、玉籬、水溜、御供所、神樂所等は町中として修復し、舞台の材木は領主が寄進し、町中の普請とし、「太騒之節者、願候而勸化」^(ママ)することが許されていた。⁽⁹⁾ 領主と町中との分担がいつころかなされたか明らかではないが、元和六年（一六二〇）「本宮上葺、同橋從殿様御再営」、万治元年（一六五八）「権現若殿氏子建立」などの記録がみられ、近世初頭には明確に分担されていたことが知れる。権現町役は町・江川にそれぞれ割付されるが、その割付の割合について、七、三あるいは三ツ割をめぐって、しばしば紛議を起している。町役による新熊野権現社の維持、修復の負担は、既述した田辺とその周辺の経済的状況からして容易ではなかったと考えられる。

町役の負担分を直接町々に割付することなく、調達する方法として考えられるものは、奉加、富突、もしくは芝居

興行による収益を充るかのいづれかである。

次に示す史料は貞享三年（一六八六）二月田辺組大庄屋と田辺町大年寄ら四人が町奉行に提出した願書である。⁶⁰

一、御当地近辺ニ而蓬萊薬師堂大破、天神之拝殿、愛宕之鳥居、若宮之鳥居、瑞籬御霊之社内、右之宮社破損仕候ニ付、繕之儀只今拾置候而へ、弥及大破申儀御座候故、町中・江川奉願候へ、芝居もの雇、其利銀ニ而破損繕仕度奉存候、且又新熊野社之儀者、御当地氏神之儀ニ御座候へ、以奉加如何様ニも破損繕仕義御座候

町周辺の田辺組内村々の社寺修復費として芝居興行の利銀を充て、新熊野権現については、町役ではなく、奉加により修復したいとするものであった。この願書は認められ、同年七月三日から八月四日まで、大坂操芝居の太夫竹本茂太夫、伊織三左衛門らが新熊野権現一ノ鳥居北の畠で興行している。竹本義太夫が貞享元年大坂道頓堀で大いに評判を得た折でもあり、この田辺興行も人気を得たものと考えられる。⁶⁰ この芝居の利銀は次のように配分されている。

蓬萊山薬師堂造作入用銀全額、西ノ谷村天神社拝殿の造作入用銀四八〇目の内三〇〇目に充て、残り一八〇目は本町、上長町、下長町、北新町の奉加銀による。愛宕鳥居にも利銀を充て、愛宕寺内造作入用銀八〇〇目の内四〇〇目は利銀、残り四〇〇目は勸化銀が充てられた。さらに権現瑞籬の繕入用、同御供所造作入用四〇一且五分は氏子中の奉加によった。⁶⁰ 右の配分によれば、芝居利銀は少なくとも銀七〇〇目以上あったことになる。奉加は神社と氏子の関係において、本来もっとも自然な維持、修復資金獲得の方法ではあるが、負担する氏子の立場からすれば、近世を通じてみられる、熊野三山をはじめとする諸国有力社寺の勸化という、半ば強制的寄付行為が頻繁に行なわれているとき、しばしば奉加を求めることは困難であり、それに代るものとして、右のような芝居興行の利銀に期待することになる。殊に先述した享保末年の町方困窮の時期に、町負担の新熊野権現内諸社の修復費用を、芝居興行利銀に求めるのは自

然の成り行きといえよう。享保十九年一月、四人の町大年寄が連名で、町奉行所に左の口上願を提出している。¹⁰³

一、此度権現其外宮數為修復、操芝居晴天三十日、春夏之内興行仕度段奉願候処、願之通被為仰付被下難有奉存候、
当三月中興行可仕奉存候、然共若見物^{人カ}□無數御座候へ、先十五日仕、残り十五日ハ追而興行仕候様ニ奉願候已
上

春夏のうち晴天三〇日を予定しているが、観客が期待した程にない場合には、一五日で切り上げ、残り一五日分は改めて興行を企てるとし、不入りによる欠損を回避しようとするかにみえるが、実際には一五日間興行の予定が当初から組まれている。上長町新八、本町兵右衛門ら世話人が大坂に行き、雇入れた操芝居は、太夫 豊竹森太夫、ワキ 竹本百合太夫、ワキ 竹本丹太夫、ワキ 竹本浦太夫、お山人形 藤井小四郎、ヤツシ 吉田浅右衛門、敵役 山本善六、座本 山本彦五郎らの一座であった。¹⁰⁴この興行には、家老、目付、奉行、町奉行、徒士目付の役数敷が設けられ、他に五匁、四匁五分、三匁、二匁五分の棧敷席が東西に設けられていた。木戸銭は五二文、芝居札二、八八〇枚は田辺領大庄屋組一〇組を通じて村々に割り当てられた。¹⁰⁵三月二日に始まり、三月二十三日には五日の加日願が認められ、四月四日晴天二〇日の操芝居は終った。三二日間のうち興行できたのは二〇日で、雨天等により一二日も休演したことになり、一五日間の旅宿入用銀二貫四五〇目の約定から推測すれば、芝居札がすべて捌けたとしても、三二日間の旅宿入用がようやく捻出できた程度の採算であったと考えられる。翌年閏三月、前年の残り一〇日に新たに一〇日を加えた二〇日を、秋か来春に興行したいと願ひ出、さらに前年の操芝居が十分な評判を得るまでにいたらなかったためか、「操人形芝居ニ而ハ買人も無御座候付、操万歳」に変えたいとし、許された。此度の興行については表Ⅱに示すように、多くの観客を寄せ、可成りの収益を得たことが推測できる。

表Ⅱ 興行と売上札数

No.	興行期間	実日数	種目	願主	売上札数		備考
					本札	半札	
1	元文1・3・9~4・20	25	操万歳	新熊野権現	12,881	1,667	木戸札1枚52文 棧敷札1枚40文
2	寛保3・3・3~3・7	5	操芝居	不詳	2,692		
3	延享4・2・15~2・23	5	[芝居]	新熊野権現	1,914		木戸札1枚30文
4	寛延1・8・18~8・30	10	[芝居]	新熊野権現	2,249		木戸札1枚32文 本札1枚76文 半札1枚38文
5	安永9・2・18~3・9	14	操芝居	勝徳寺	5,720	4,980	
6	安永9・3・23~4・18	30	地事脛業芝居	熊野本宮	5,495	3,531	
	安永9・8・1~8・18		地事脛業芝居	熊野本宮	5,462	2,762	
7	安永9・8・20~8・28	6	地事脛業芝居	本正寺	2,500	910	
8	天明1・2・6~3・5	13	操芝居	勝徳寺	3,745	2,590	
9	天明1・3・11~4・24	23	地事脛業芝居	本正寺	6,763	6,133	虫損部分は除く
10	天明1・10・16~11・3	15	地事脛業芝居	熊野本宮	2,280	1,311	
	天明2・6・9~7・6	14	地事脛業芝居	熊野本宮	1,686	1,628	
11	天明2・7・23~8・27	?	地事脛業芝居	庚申堂	3,849	1,518	
12	寛政1・8・5~8・11	7	相撲芝居	紺屋町	1,600	750	
13	寛政1・9・10~10・4	20	地事脛業芝居	紺屋町	4,633	1,970	
14	寛政9・5・28~6・8	7	相撲芝居	本正寺	1,460	475	
15	寛政9・9・19~10・19	27	地事脛業芝居	願成寺	3,875		
16	寛政10・2・11~3・20	23	地事脛業芝居	能満寺	4,368	4,845	
	寛政10・3・21~3・26	5	地事脛業芝居	願成寺	775	950	
17	寛政10・8・22~9・19	19	地事脛業芝居	願成寺	1,808	2,656	
18	寛政12・4・24~5・22	30	操芝居	法輪寺	3,597	1,738	
19	享和1・2・27~3・14	15	糸からくり芝居	不詳	2,603	2,442	
20	文化3・9・28~10・5	6	地事脛業芝居	願成寺	400	475	
21	文化9・3・6~3・17	9	相撲芝居	片町	2,500	775	
22	文化9・7・7~8・16	25	[芝居]	願成寺	3,130	2,620	
23	文化10・11・11~閏11・16	25	地事脛業芝居	地藏寺	3,490	2,435	内6日は願主 新熊野権現
24	文化11・9・1~10・16	28	地事脛業芝居	紺屋町	3,885	1,730	
25	文政4・9・11~10・13	30	地事脛業芝居	教学院	4,950	1,650	
26	文政6・4・16~5・15	20	操芝居	本正寺	2,935	1,320	

備考 No.1~4は「芝居勘定帳」(田所家文書)による。

No.11,25は「万代記」他は「田辺町大帳」より集計した。

No.1~4の「売上札数」欄の左は木戸札,右は棧敷札を示す。

興行がこのような常に当るとは考えられず、むしろ欠損の危険性を常に孕んでいる。比較的その危険性の低いものとして富突が考えられたのは当然であった。富突については、射倅心を煽り、良俗を害するものとして、幕法で原則として禁止している。

権現富突の願が出されたのをうけて、享保二十年一月十六日「被仰聞候へ、権現富突願之儀異様ニ相聞候故、和歌山へ不被仰遣候而へ御赦免難成」と本藩に伺出なければ田辺領として正式に富突を許可できないとし、従って今回の富突の願出は、社寺が内々に催し、「役人衆御存知無之分ニ致候様」と領主側と関わりのないものとしている。しかし町奉行がこの富突の呼称について、権現富突ではなく、「権現御闖」とするよう特に指示している点からも、領主側公認の富突であったことは明らかである。元文元年（一七三六）一月第一回御闖は札高八、二九〇枚、一枚銭一二文で、売上げ高銭九九貫四八〇文、当り札及び雑用高銭五二貫六五文、差引利銀六〇七匁八分八厘であった。先にみた芝居より確実に利を得たように思われる。しかし第二回、第三回が同年六月、九月と催されたが、利銀は銀七三匁六分三厘、一九三匁一分七厘、あるいは寛保元年（一七四一）一月には銭一〇貫六三一文といずれも第一回ほどには利銀を得るに到っていない。これは御闖が余りに頻繁であったこと、さらに褒美銀一番が銀一〇〇匁という比較的低額に抑えられて、庶民の射倅心を十分煽るまでに到らなかったことによるものであり、それは又、「御闖」が内々に催されていることの限界ともいえよう。

後述するように、江川浦、紺屋町の芝居興行が認められると、新熊野権現社修復助成のための興行と競合することになり、そのため予め年々の興行日数を長期に涉って確保し、興行の定期化を求めようとする動きがみえる。

奉願口上

紀州田辺領における芸能興行について

新熊野鶏合権現之儀、本社、若殿、西御前之外ハ皆々仮殿ニ御座候故、元來龜相ニ仕立申付、雨漏速大破候故、
 竝早修覆懸リ不申候、町・江川とも少々宛毎月掛銭ニ仕集候へとも、其分ニてハ急ニ建立難仕御座候、右申上候
 通、大破之宮數ニ御座候得ハ、氏子共建立可仕方便無御座迷惑仕候、然共延々ニも難成御座候、就夫、御当地在
 辺へ罷越、毎度地祭等仕候辻打操芝居、晴天十日宛五ヶ年之間御赦免被成下候ハ、夏秋之内時節ヲ見合、本町
 会所跡ニて興行仕、其余力旁ニ而近年之内、中四所、下四所建立仕度奉願候。

寛保三年十月大年寄四人が町奉行宛に願出たものである。わざわざ大坂から一座を呼び下すのでなく、周辺の村々
 の地祭で興行している辻打操芝居を、毎年晴天十日、五ヶ年に涉り興行し、年々利銀を得、それにより計画的に再建、
 修復をすすめたいというのである。町奉行は翌月、毎年五日、五ヶ年間何時にても勝手次第として認めた。具体的に
 この試みが如何ほどの収益を上げたか明らかなではないが、延べ二五日では多くを期待することはできなかったであ
 る。

町・江川としては新熊野権現芝居の欠損は自らに降り懸る問題であるだけに、種々の安全、確実な興行方法を試み
 ざるをえない。評判を呼んでいるようにみえる当地の興行の期限が切れた時点で、改めてそのまま継続し、継続分を
 新熊野権現の収益分としようとする試みがその一つである。

願書

此度地藏寺々御願申上、御聞濟興行仕候芝居之儀、竝早一日ニ而終申候、然処、闘鶏宮毎々修復ニ付、物入等多
 く御座候へハ、右芝居晴天六日御赦免被成下候ハ、少々之助力ニも相成可申と奉存候故、内々芝居世話人共掛
 合、楽屋ハ其儘寄進ニ為致、役者共之給金等も安く為仕掛合申度奉存候へハ、何卒日數晴天六日之間、右之場所

ニ而其儘芝居興行御赦免被成下候ハ、關鷄宮之諸事入用助勢ニも相成可申と難有奉存候、何卒願之通被仰付被下候様奉願上候已上。

文化十年（一八一三）閏十一月二日、町大年寄四人が町奉行に提出した願書である。地蔵寺修復助成の地事輕業芝居は延長五日分を新熊野権現芝居として興行することが認められた。小屋掛の部分はそのまま、その上役者の給金も安くさせようという虫のよさで、如何にしても相応の利銀を確保したいとする町大年寄らの意欲、あるいは強かさを思わずにはおれない。

新熊野権現社の維持、修復助成に関わる芝居興行は、表Ⅲに示したように他にもみられるが、興行回数からみても、しだいに町・寺院を願主とする興行に圧倒されていくことになる。

表Ⅲ 町・江川とその周辺の主な芸能興行

種 別（座 本）	願 主	世 話 元	興 行 期 間（日数）
説 教 操 （大坂勘右衛門）	江 川 浦		延宝5・6・13・7・2
操 芝 居 （竹本茂太夫）	不 詳		貞享3・7・3・8・4
〔芝 居〕 （大坂松本次太夫）	松 雲 院	和歌山田中町 茂平	元禄1・6・9・7・7
〔芝 居〕 （藤井小三郎）	松 雲 院	上長町 弥十郎ら	正徳3・7・16・8・3
浄瑠璃芝居	新熊野権現		享保19・3・2・4・4
操 芝 居	新熊野権現		元文1・3・9・4・20
操 万 歳	大 福 院	和歌山金屋町 平兵衛ら	元文2・3・16・
浄瑠璃芝居 （陸奥茂太夫）	大 福 院		元文2・9・10・24
〔芝 居〕 （吉川重太夫）	紺 屋 町		元文3・1・2・
〔芝 居〕	紺 屋 町		25 30

地事輕業芝居 (淺尾三之助)
 操 芝 居 (市村六之丞)
 地事輕業芝居
 相 撲
 地事輕業芝居
 相 撲
 淨 瑠 璃 撲 (竹本喜三太夫)
 こま廻し
 地事輕業芝居 (淺尾勇次郎)
 〔芝 居〕
 淨 瑠 璃 撲
 相 撲 馬
 曲
 淨 瑠 璃 撲
 操 芝 居 (上村源之丞)
 〔芝 居〕
 相 撲 芝 居 (小林六太夫)
 操 芝 居
 地事輕業芝居
 地事輕業芝居
 地事輕業芝居
 地事輕業芝居
 地事輕業芝居
 地事輕業芝居 (谷村菊之助)
 地事輕業芝居 (藤川猪之助)
 相 撲

(3) ~~(20)~~ (5) ~~(23)~~ ~~(27)~~ ~~(12)~~ (7)

地事輕業芝居	相 撲	操 芝居	相 撲	糸からくり芝居	相 撲	淨 瑠璃	糸からくり人形遣	地取錢相撲	操 芝居	辻打芝居	地取錢相撲	子供狂言辻打芝居	地取錢相撲	地事輕業芝居	相 撲	芝居	曲彈物真似	淨瑠璃物真似	地事輕業芝居	地事輕業芝居	操 芝居	淨 瑠璃	操 芝居
(藤川伊勢松)		(小林六太夫)							(小林六太夫)												(上村菊太夫)		(吉川安五郎)

南部新福寺	本正寺	法輪寺	教 學 院	神子浜村梵天宮	不 詳	高山寺	大福院	大福院	觀行院	宝乘院庚申堂	叶 院	宝乘院庚申堂	宝 乘 院	願 成 寺	片 成 町	願 成 寺	湊 村	湊 村	地 藏 寺	新熊野權現	江 川 浦	不 詳	宝乘院庚申堂
湊村 嘉七・銀兵衛	湊村 六太夫	袋町 佐吉・嘉七	紺屋町 源藏・本町 幸次郎	神子浜村 吉藏・長兵衛	紺屋町 源藏	紺屋町 源藏ら	紺屋町 源藏	紺屋町 指物屋源藏	紺屋町 指物屋源藏				南新町 生馬屋専藏ら	袋町 吉兵衛				紺屋町 瀧藏・源藏	紺屋町 瀧藏・源藏	紺屋町 瀧藏・源藏	孫九郎丁 松屋和七	紺屋町 源藏・瀧藏	

寛政11・7・30	寛政11・11・11	寛政12・4・24	寛政12・6・7	寛政12・8・1	享和1・2・27	享和1・9・3	享和3・閏1・1	文化1・10・11	文化1・11・4	文化2・2・7	文化2・7・27	文化2・8・11	文化3・9・28	文化9・7・7	文化10・3・12	文化10・11・11	文化10・閏11・5	文化11・3・15	文化11・4・11	文化11・5・11			
11	11	24	7	1	27	3	1	11	4	7	27	11	28	7	12	11	5	15	4	11			
30	11	5	6	8	3	3	1	11	4	7	27	11	28	7	12	11	5	15	4	11			
11	11	22	11	5	14								10	16		4	16						
(15)	(5)	(5)	(5)	(5)	(15)							(12)	(6)	(19)	(10)	(19)	(6)	(5)	(15)				

[illegible]

操	芝居	(小林六太夫)	湊村他(祭)	天保3・閏11・22
操	芝居	(小林六太夫)	敷	天保3・閏11・23
操	芝居	(小林六太夫)	西谷村	天保7・11・14
操	芝居	(小林六太夫)	湊村	天保9・11・27
操	芝居	(小林六太夫)	湊村(祭)	天保10・
操	芝居	(小林六太夫)	伊作田村他(祭)	天保10・12・3
操	芝居	(小林六太夫)	不詳(祭)	弘化2・11・12
操	芝居	(小林六太夫)	新庄村	弘化2・11・14
操	芝居	(小林六太夫)	湊村	弘化2・11・16
操	芝居	(小林六太夫)	神子浜村	弘化2・11・19
操	芝居	(小林六太夫)	敷村(浦直し)	弘化2・11・22
操	芝居	(中村金太夫)	江川浦(祭)	弘化3・11・23
操	芝居	(小林六太夫)	新庄村(祭)	弘化3・11・27

備考 『万代記』『田辺町大帳』『御用留』『芝居勘定帳』より作成した。芝居とのみ記したものは種別欄に「芝居」とした。

紺屋町、江川浦芝居

紺屋町は会津川東岸に接した町で、承応元年（一六五二）網屋町が検地竿入されたのについて翌年「紺屋町御検地入」との記録もあり、この時期に田辺城下の北西の町として整えられたようではあるが、町場として十分発展したとはいえなかった。

江川浦は会津川を隔てた西岸の浦で、近世中期には本町、中町、堀之町、川端町などの町があるが、多くの場合江

川として一括した呼称で扱われている。

紺屋町が紺屋、指物、鍛冶などの職人と日用、仲仕などの生活基盤の不安定な層を多く抱え、しかも町場として十分な展開を示していない点を近世末期まで残していたことは、芝居興行との関わりを考える上で、注意しなければならぬ。零細な経済基盤をもつ町であることを示す例をいくつかあげよう。天保五年（一八三四）秤改めが実施された際、紺屋町では小量まで計量可能ないてんぐ三丁、重量物を計量する千木（杠秤）取合二丁、計五丁で、町・江川の総秤数二九三丁の一・七%を占めるに止まり、上長町の六五丁、北新町の九四丁に比して、如何にも零細な商いを窺わせる。また化政期、町・江川の竈数、人口における紺屋町が占める割合は、約八〇九%であるが、御用銀をはじめ種々の課役は〇・二〇・六%に止まり、文政八年（一八二五）十一月領主側が国産方出入の大坂商人二人に対し、大坂表へ領内産物の積登しを引請させるに当り、その趣意を説明するため、有力町人一九名を町会所に集めているが、紺屋町の町人はその中に含まれていない。さらに天保二年四月城普請に際して、町・江川に献上銀、人夫の差出しが命じられている。献上銀五貫五六二匁の内紺屋町は銀一貫一四九匁を負担しているが、人夫については、二九九工の内五〇%に相当する一五〇工を負担している。町場としての展開の不十分であるとする点については次の例をあげよう。文化八年（一八一）四月雨天続きのため麦の収穫に際して、麦こなしの作業を家の表で行なっていることについて、町奉行所からこの種の作業は町内に適わしくないとして、麦こなしをしている者の名前を書き上げさせた。袋町、片町、紺屋町、北新町、南新町から計七八名が書き上げられたが、その内五一名は紺屋町で「家之裏にて麦すぎ、莚干仕候者」であった。文化三年の紺屋町の軒数が七九軒であるから、六五%以上の家が多少とも麦作に関わっていたことを窺わせる。さらに天保九年八月「町江川家数人数牛馬共書上」によれば、牛二六疋中一五疋が

紺屋町で飼育されており、南新町八疋の二倍あり、いずれも農耕用であつたと考えられる。

右にあげた実状は、紺屋町年寄が町大年寄に差出す願書に「紺屋町之義へ職人、日用稼之者、又は又々之田畑預り作等仕、難洪之者共斗」と常用される文言に端的に表現されている。

江川浦は享保末年には八端帆から三端帆の廻船一一艘、漁船、網取船一六艘、天保九年には漁船七八艘をもつ浦であつた。表一に示したように漁師二七人のうち六三%に相当する一四三人が関東、四国の各地に出漁し、出稼ぎをしている。江川浦の生活の実態がどのようなものであつたかは具体的に明らかでないが、紺屋町以上に経済的基盤が脆弱なものであつたことが推測できる。

紺屋町、江川浦においては芝居興行がどのような方法ですすめられたであらうか。

芝居興行の早い例は江川浦における延宝五年（一六七七）六月にみえる。

己ノ二月江川浦々芝居御訴訟申上、相叶候而、同六月ニ江川浜多ひすの前ニ而、十三日々七月二日迄廿日之間
仕候、太夫本 大坂勘右衛門、説経操、但太夫 長嶋重太夫、ワキ太夫 出来嶋一学、右ハ江川浦及困窮候ニ付
被為仰付^付

江川浦の困窮を理由に、景況の回復をはかるべく願出たものであつた。江川浦困窮の直接の原因は何か。「田辺諸事控」には「延宝三乙卯、同四丙辰同年飢饉、疫病、人民多死ス、此年旦那様ヨリ銀三十枚町中へ被下、同七月十三日ヨリ十五日マテ飢人粥被仰付」とあり、熊野の年代記である『歳代記』にも「延宝二年六月十一日大雪、熊野大飢饉、都而紀ノ国五畿内大洪水、人馬多流死^死」とある。延宝二ノ四年の飢饉、それによる米価の高騰が江川浦の住民の生活を大きく揺るがせたと考えられる。ここにおいて、景況浮揚の一策として芝居興行が企てられた。興行による直

接的収益だけでなく、零細ながらも小間物商い、雇傭を生み出すなどの経済的波及効果に期待するところがあった。しかも江川浦が城下並みではあっても、川を隔てた浦であったこと、換言すれば芝居興行を領主側が認め易い地理的条件にあったことが指摘できよう。紺屋町も厳しい経済状況にあったと考えられるが、江川浦の興行が許された翌年の延宝六年一月「紺屋町近年身軀成不申候故、芝居訴訟申上候得共、終ニ不被為仰付候」と、理由は付していないが興行が許されていない。同様の願出は享保十六年（一七三一）二月、同年九月にもあるが、いずれも「不相叶候」とある。

和歌山藩では元禄五年（一六九二）一月、湊町「御救」のため、同月中旬から新堀で操芝居の興行を認め、一月二十八日操芝居の一座を西ノ丸に招き、藩主の子供たちが操芝居を見物している。元禄年中には操芝居だけでなく淨瑠璃、狂言尽が新堀などで興行されている。田辺領においても当然城下における興行は憚るところがあったのであろう。江川浦の願も無条件で認められていたわけではない。享保十二年三月、鯨船の浦直しと、さらに江川商人問屋船頭と袋町商人連名で鯨納屋御祝義直しのため粉川七之丞の操芝居興行を願出、大庄屋、大年寄らは内諾を与えているが、町奉行が「此度ハ無用」として認めなかった。不許可の理由として考えられることは、鯨納屋の竣工祝い、さらに袋町の魚商いの町人が加わっていることに難色を示したのではないかという点である。この時期にあっては、浦直しという「御救」と城下を外れているという二つの条件が合致して、はじめて興行が認められるものであったといえよう。享保末年の深刻な事態に直面して、享保十八年七月領主側は先述したように、景況振興について広く町在からの建策を求め、同時に城下の町人に対して、遊山音曲など従来領内に認められていたいわば芸能については、城下町の内外を問わず認めるという、領主側の柔軟な方向が示された。

享保十七、十八兩年の飢饉、同十九年の大洪水により「内外損亡夥數、内証衰微仕」る状態となり、決壊した小泉土手の普請について町役負担の用捨が町方から願出される事態となっている。⁸⁰⁾

和歌山藩ではこの様な事態に対応するかにように、享保十九年春、寺社の開帳を許し、町在の「御救」として、歌舞伎、操芝居の興行を認め、四〇年来の歌舞伎興行の解禁で大いに賑わった。殊に欠作、中ノ島、日前宮、栗林、愛宕では大芝居が興行され、享保二十年には町会所の關所銀で新雜賀町船場に常設芝居小屋を建て、町在困窮者のための芝居興行をしている。⁸¹⁾

田辺領においては従来新熊野権現の助成と江川浦の浦直しに限定されていた芝居興行を広く認めようとする方向は、享保十九年の大洪水と和歌山藩の積極的な興行容認政策によって一段と促されることになる。

享保十八年十二月新熊野権現社修復のため操芝居が願出され、久しく絶えていた興行が再開されたことは先述したが、この興行に続いて紺屋町から興行を願ひ出た。当時の紺屋町の状況は、嘗て延宝期領主側から興行願を拒否されたときとは一段と深刻の度を深め、「町並之諸御用等難相務、迷惑至極仕候」状態であり、「町並之諸御用等相務、町内之者共立行可申」ためにも、操万歳を晴天三十日、来年春、夏の内に興行したいと願出た。⁸²⁾しかし翌年春には後述する大福院芝居が興行されたためか、同年七月に三〇日の内二〇日の興行を新熊野権現社前の大福院で催すことを改めて願出た。座本吉川重太夫と記すだけで興行の内容は知れないが、当初予定の二〇日は三〇日とされ、さらに翌元文三年（一七三八）春、晴天二〇日に五日追願して二五日、総計五五日間の興行を終えた。興行日数の延長についても可成り寛容であったことを窺わせる長期興行であった。紺屋町芝居は以後寛政元年（一七八九）八月、前半七日相撲、後半二〇日地事輕業芝居、計二七日の興行、文化三年（一八〇六）二月、祭礼の筈鉾修理の費用を町民負担に

することが困難であるとの理由で、その費用捻出のため、晴天三〇日を願出ているが認められず、同九年改めて願出ている。この際、興行が来春であれば今年暮に改めて願出るよう、一度差し戻された。しかし来春一番は地藏寺の予定があるとしてその年も不首尾に終わり、最初の願出から八年後の文化十一年九月一日から二八日間、嵐熊十郎、藤川庸市ら一行二八人の地事輕業芝居が興行された。紺屋町芝居はこの興行を最後とするが、この間、延享二年（一七四五）下長町の浄瑠璃会、寛政三年（一七九一）四月袋町浄瑠璃会など他町からの願出はみられるが小規模なものに止まっている。

享保以後江川浦から浦直しのため興行願がしばしば出されている。「江川浦之義、近年不漁打統申ス上、当年ハ一切漁事無御座、漁師共及渴命申様ニ相成苦々敷奉存、仍之浦直⁶⁴」しのため芝居興行したいとする文言が常用されているが、事実漁事一通りの浦にあつては、潮行の如何が漁に、ひいては浦の景況に大きく影響した。しかし浦直しの興行は延宝五年（一六七七）以来宝暦六年（一七五六）まで認められていない。しかも宝暦期には芝居の入込みを統制する動きがいくつか窺える。宝暦十年在方へ操芝居の入込みを禁じ、宝暦十一年伊作田村を三人の傀儡師が通り過ぎたことに対して庄屋を糾明し、興行したことはない⁶⁵と庄屋が弁明している。地祭についても夜分は一切認めず、早朝から初夜以前の一日とし、その際前日に届出、田辺組については役人が地祭当日村に入込むとした。⁶⁶江川浦についても「狂言鉢之義有之由」として、早々に差し留めるよう町奉行が指示している。このように興行の統制をはかった理由の一つとして考えられるのは、「費ケ間敷」動きに対する抑制にあった。

在中地祭、村ニ寄過分花代并雑用小入用帳へ出候所有之候、右ハ小組之芝居ニテハ雑用無數所、大組之芝居故ニて候間、自今ハ大組之芝居致候ハ、二三ヶ村、又ハ四五ヶ村組合候て入用減候様、猶又大前へ相對出させ候

て、至極不足之分小入用割へ出候様御申通可有之候⁸⁹。

地祭に際しては村内の出費を可能な限り節約するために、数か村連合の興行とし、その費用については、大前すなわち有力高持百姓間で負担し、小前百姓の負担とならざるように、というものであった。さらにこの「費ケ間敷」を抑制しようとする、いわば儉約令の背景にある町在内部の動きにも注意することが必要であらう。安藤精一氏が明らかにした元文期以降の在方商業の發展と、領主的貨幣經濟の一環たる町方商業の危機の進行とに関わることは否定できなからう。

新庄村をはじめとする在方において、山内出荷物の主要部分を占める椎茸、茶、薪炭などは在方商人により買留められるだけでなく、味噌、醬油にいたるまで仕込み、町・江川で在方が仕入れる必要がなくなり、「町・江川次第ニ淋敷罷成、商人ハ不及申、船持并中持体之者迄稼無御座、渡世難送迷惑至極仕候」状態であった⁹⁰。以後新庄村の在方商人の仕出す商品の種目をめぐっての紛争、新庄村だけでなく富田組、朝来組、芳養組の一九軒が町商人から「在世早速引候様⁹¹」願出るなど、町方商業に対抗しうる力を在方商人が着実につけていた。在方商業が大前、中前の農民の作間稼として営まれていること、他方多くの貧農層は富農層から前借りにより商品生産に従事していること、これらの諸条件のもとで度重なる凶作は在方内部の階層分化を一段と促すものであった。安永六年（一七七七）八月米払底により小前層が難渋している原因が入津船に対する石錢銀にあるとして、町・江川小前一同が石錢銀の一〇か年免除を要求した事件は、この期の領主側、在方商人、小前間の矛盾を露呈したものであった。

江川浦の興行は安永以降子供踊りに止まり、一日興行のものが多く、芝居興行の主流は寺院の修復助成を目的としたものに移っている。

寺院修復助成芝居

田辺領町における寺院の開帳に際して芝居興行する例はほとんどみられず、多くは寺院の本堂、諸堂、庫裡等の修復助成を名目としたものであった。

先述した貞享三年（一六八六）蓬萊山薬師堂等の破損修理の助成を名目とした操芝居興行は早い例であるが、早い時期の興行は、松雲院、大福院には限定されていることが注意される。

権現松雲院の普請借用銀返済のために元禄元年六月大坂松本次太夫ら操芝居一座の興行が催されている。この興行は和歌山田中町茂平が銀二貫目で請負ったもので、晴天二三日の興行であった。この興行の終りに近い閏六月二十七日に木戸札七〇〇枚（一枚米一升）、最終日七月七日木戸札二〇〇枚（一枚三五文）が田辺組の村々に割当てられている。茂平が請負銀とは別に益銀の内から銀四五八匁六分七厘を松雲院に寄進しているが、右の木戸札の割当て分と関連したものであろうか。松雲院の芝居は正徳三年（一七一三）七月大坂から藤井小三郎を座本とし、陸奥茂太夫ら一行二人の浄瑠璃芝居一座を呼び、晴天一五日で興行を許された。役者らが松雲院への寄進を名目に一日の加日を願ひ、許されたが、雨天と鳴物停止の服忌が続いて実現しなかった。この興行は総収入銀一五貫余、諸色雑用賃銀一二貫余を差引いて三貫余の利益を得、成功を収めている。松雲院芝居はその後元文三年（一七三八）七月、延享元年（一七四四）三月の二回に涉って三〇日間の相撲芝居を興行している。

大福院芝居については、元文二年三月和歌山金屋町平兵衛、新雑賀町利右衛門が勧進元となり、陸奥茂太夫ら四人

を中心とした浄瑠璃芝居がみえる。

松雲院は慶安三年（一六五〇）万呂村待賢寺が湊村新熊野権現社辺に移り、本山である京都仁和寺から松雲院号を許された真言宗寺院であり、待賢寺は新熊野権現の社役を務める寺とされた。また大福院は湊村にあって「新熊野山本願大福院」を称し、修験家として京都三寶院末派となり、大先達紀州飯道寺袈裟下となった。新熊野権現社一山の修理については本願職をもって社役を勤めていると主張している。⁴³ 松雲院、大福院がいずれも新熊野権現の社役を勤めるという特別の立場を主張したことが、新熊野権現と並んで早い時期に修復助成の芝居興行を領主側が認めた背景にあると考えられる。

松雲院、大福院以外の寺院で宝暦期までに修復助成芝居を認められたのは、寛延三年（一七五〇）西本願寺末寺勝徳寺、宝暦八年（一七五八）真言宗根本寺薬師堂の例に止まる。このような状況は既述した宝暦以来の興行統制に関連すると思われるが、安永三年（一七七四）次のような触が出されている。⁴⁴

一、当時御領分近在ニ辻打鉢之義有之、子共芸と号、かぶきニ似寄之義致候趣相聞候、右鉢之義致間敷候、堅指留候

當時有之筋ハ勿論、入込有之役者共有之候ハ、早々送り出候様可仕候

一、勢州御領分ニても本文鉢之義、自今堅為仕申間敷事

一、輕業、相撲ハ不苦候

勢州の和歌山藩領へも徹底がはかられている点から、当然右の触は本藩から出されたものである。輕業、相撲の興行については認めることを確認し、それ以外は一切認めないとするものであった。またこの直後田辺領内にも近年願

出と実際の興行内容が異なることがあるとして、次のように触れている。⁴³⁾

一、寺社修復又は開帳之賑等ニ見せ物、輕業駄之義為致度段相願候て、芝居駄紛敷品を致候義、近キ比まゝ有之由、右願濟之品ハ其寺社願元之者能存罷在候義、勿論ニ候へども、願ニ相達致候義ハ、嚴重ニ其願元之者指留可申事候、自今右駄興行之節、心得違無之様寺社一^等急度申聞候様可仕候、万一心得違背キ之品於有之ハ、急度御咎被仰付ニテ可有之候

勸進元が統制の網の目を潜り、色々な手段を尽して興行を続けようとするのに対し、一層細かく領主側が統制を加えていく間に、勸進元もしだいに興行意欲を失わざるを得なくなる。

安永九年予て願出ていた勝徳寺の操芝居が許されたのを契機に、熊野本宮、本正寺が続いて興行することが認められ、久しぶりに活況をみせた。(表Ⅱ、表Ⅲ)

勝徳寺芝居の名目が修復助成であったか必ずしも明らかではないが、興行統制下にあつて勸化、拝借米銀による助成策⁴⁴⁾はあつても、本格的興行への寺院の期待は根強くあつたと考えられる。そればかりでなく町在の人びとの興行に對する期待も抑え難いものがあつた。勝徳寺芝居が許されたことは、たちまち町在の評判となつたようで、領主側は興行の前に、従来の町在に對する引締め、儉約令が弛められたものでないことを触れざるを得なかつた。

一、近キ比御儉約ゆるミ候て、町在共寺社会式場所ニテ、辻げんへいなど申物も不苦、町人之寄座も御免ニテ、町表御触有之候と、在ニテ専風説有之由、察る所勝徳寺操芝居興行ニ付、御儉約ゆるみ候と下説致と相見へ、全虚説ニテ候間、已前被仰出候通、心得違無之様、早々夫々へ可被申触候以上⁴⁵⁾

淡路上村源之丞(上村日向掾)座二六人は船で江川に着岸し、権現松原に小屋掛けして二月十八日から三月九日の

晴天十四日興行した。孫九郎丁吉兵衛が銀八五三匁で落札請負ったこの操芝居は外題に忠臣蔵、悪源太平氏合戦、菅原伝授手習鑑、祇園祭礼信仰記、国性爺合戦、花扇かんとんの枕入事出語りなど知られたものが並んだことも手伝って、一枚銭七六文の本札五、七二〇枚、一枚三八文の半札四、九八〇枚、合計一〇、七〇〇枚という記録的な札の売れ行きであった。一座の楽屋に「日本第一諸芸衆能冠」の額を懸けている上村日向掾の人氣に対して領主側は「町々若キ者芝居者へ送り物有之由、急度さし留申ニ而ハ無之、格別花麗成義、費ケ間數品無之様ニと被仰聞」に止まり、観客の熱氣は抑え難いものがあつた。

勝徳寺芝居の熱氣の冷え切らない同年の春と、続いて夏の三〇日間、熊野本宮助成の地事輕業芝居が社家の願いにより、勝徳寺芝居跡地で興行された。この地事輕業芝居も勝徳寺芝居をさらに五〇%も上回る観客を集めた。熊野本宮はこの際勸化も行なっており、合せて相当な収益を上げたものと考えられる。さらに本宮芝居の出入に合せて、新熊野山大福院が修復助成のため、行基作と伝える不動尊を三月二十日から一五日間開帳し、併せて熊野三山の懸物等を展示したいと願出ている。本宮芝居の夏の興行の後、さらに続いて安立山本正寺の芝居が晴天六日興行されている。このように安永九年の春から夏にかけて、操、地事輕業芝居が五〇日間も興行され、延べ三万人を越える町在の人々が芝居に魅せられた。弛められたかにみえた儉約令を再度確認するかのよう、「衣類等、此間も芝居見物人之内、心得違之筋粗相聞候、勿論町表は御儉約ゆるみ候と申由、町ハ支配違にて候へバ、如何躰ニもせよ、在中ハ一向ゆるみ候義にてハ無之候」と、本正寺芝居が終ろうとするとき、郡奉行が敢えて触出している。

翌天明元年にも勝徳寺、熊野本宮、本正寺が前年と大略同じ計五一日の興行を続けた。勝徳寺は前年同様上村源之丞一座、熊野本宮は新宮における興行を予定していたが許されず、前年に続いて田辺での興行、本正寺は地事輕業芝

居で前年の八二%の観客に止まった。

右の両年の興行の成功はその後町在の寺院が競って修復助成の興行を願出る契機を与えるものであった。

興行が盛況を極めると、従来多くの場合湊村松原の地で興行されることに對して、湊村の庄屋として不都合を申し立てる場合があつた。

(タカ)

これこれ見物ニ罷越候得ハ、其日暮之難渋者なども、人立之賑ひニうかくと仕、女子、若キ者共折ニ拔く見物ニ參、かごかき之子共も終日芝居側ニ遊様候ニ相成、猶地下芝居場見へ透候得ハ、家内之仕事も手ニ付不申、如何牀立候亭主分之者共心配仕候ても、取兼申候

日常生活に對して厳しい引締めがなされている在方から、町方の弛みが場所柄露骨に見え、誘い込み兼ねない。近年は凶作が続ぎ、芝居興行も間が空いているが(天明末年)、近々に紺屋町の相撲芝居が興行されるらしい。相撲芝居については先年興行され、その後豊年が続いたこともあり、今回は権現松原でよいとしても、続いて歌舞伎芝居(実際には操芝居)が興行されるのである。紺屋町の窮状は十分理解でき「難渋ハ相互之義ニ御座候へバ、紺屋町之障ニ相成候も氣之毒」であるので、今回の紺屋町芝居を権現松原で興行することは致し方ないが、今後はぜひ他へ移して欲しいと、湊村庄屋が願出ている。芝居興行が周辺の人々を如何に浮き立たせたことか、これから十分窺える。芝居場は訴えにもかかわらず、直ぐには他に移されてはいない。寛政九年(一七九七)願成寺の地事輕業芝居以後橋台下の川原に小屋掛けされることが多くなるが、人集めに有利な権現松原に固執している場合も少なからずみられる。

寛政四年(一七九二)地祭の際操芝居の興行は過分の雑用となることもあり、当分在方での興行を禁止する触を

はじめとして、「遊興情弱よからぬ事を見習、自然と耕作ニも怠り候よりして、荒地大ク困窮ニ至り、終ニ其果ハ離散之基ニ成⁸³」ると、風俗の紊乱と生活破綻の基であるとの観点から、遊芸、歌舞伎、浄瑠璃、踊の類が禁止されていくのと同時に、町方においても、興行が小型化し、多彩な内容が盛り込めないという状況下で、寺院の破損修復の助成を興行収入に多く期待することが困難とならざるを得なくなり、天保七年（一八三六）二月寺社賑救講⁸⁴が興行に代る助成策として企てられることになる。

おわりに

近世田辺領町在における芝居興行の展開には、大きく区分して三つの段階がある。第一段階は、総産土神たる新熊野権現の社殿修復の経済的負担が町方で困難となり、その助成費を生み出すため、領主側から特に許された時期である。第二段階は経済的に零細で不安定な社会層を相当数抱えて、享保末年の飢饉でもっとも強く打撃をうけた紺屋町の救済を目的とした興行が許された時期である。この時期には延宝期に例外的に認められた江川浦の興行が、浦直しとして持続的に認められるが、江川浦が紺屋町と共通した経済基盤をもっていることに依ると考えられる。第三段階は宝暦期以来の芸能統制が安永九年勝徳寺の助成興行を機に事実上弛められ、以後寺院修復助成の興行が主流を占めるにいたる時期である。

いずれの段階においても芸能興行が町在の経済状況と密接な関わりをもつて展開していることは否定できない。

小論においては興行の全体的動向を指摘するに留まったが、今後に残した課題が多い。

景況振興あるいは助成を名目としたものであるが、具体的に興行収益が如何程であったか。「芝居帳」が若干残されているが、個々に分析する必要がある。化政期以後興行規模は小さく、数日の興行で収益への期待を多くもつことは困難で、むしろ地祭の余興としての興行に変わったように考えられる。芸能統制の強化がすゝむなかで、興行収益の魅力は失われざるを得なかったともいえよう。

田辺の芸能興行で注目されるのは、地事輕業芝居と淡路の操芝居である。歌舞伎芝居が指留められても、輕業は相撲とともに興行が許されている。願主はその点を利用して、輕業を称して「芝居駄紛數品を致候義、近キ比まゝ有之」と領主側が警告しているように、実際には歌舞伎芝居を興行している。外題から察しても歌舞伎芝居と同じである。しかし一座の役者書上げをみると、囃子方が必ずしも入らないで所作事を抑えた、まさに地芸、地事の芝居であったが、観客を魅了するに十分であったかにもえる。幕末には、淡路の操芝居が他を圧倒する。これらの芸能の内容、役者の活動について、書上げの検討、他地域の興行との関わりを考察する必要がある。

註

- (1) 土田衛『家乗』芸能記事一覽（『芸能史研究』八四号 一九八四・一）
- (2) 西岡直樹『三浦家文書』年中行事『芸能記事一覽（延宝〜元禄期分）』（『芸能史研究』九六号 一九八七・一）
- (3) 拙稿「近世後期津山とその周辺の他所芝居興行」（『鷹陵史学』一〇号 一九八五・九）において、美作国一宮中山神社の四月の例祭の折に、多彩な他所芝居興行がみられるが、とくに天保期町方の困窮に際して景況振興の一策として興行による経済的波及効果を期待している点のあることを指摘し、社会経済環境に注意を払いながら論じた。
- (4) 宝永四年一月四日田辺を襲った津波の惨状については、『万代記』（田辺市立図書館蔵）、『記録』（田所家文書 田辺市立図書館蔵）に詳しく記している。『記録』により左に概観したい。

未上刻、大地震、古蔵、古家ゆり崩、無間も津波上り、本町、片町、紺屋町多流失、江川不殘流失、大橋落、伊作田村辺浦辺なとハ散々ニ成候、田所家潰レ申候、平治家(田所氏の一族)ハ殘、平治居宅床々五尺程上ル、急成事故老人、子供流死式拾四人、牛馬犬猫鶏水死多、津波打來と知候ニ付、蓬萊山、上野山へ逃去候人々有之、船も家も一所ニ成、日暮迄三度波來、夜ニ入候而も可來哉と山上ニ臥り、又ハ高ミ迄來居候、筋毎夜分松明灯燈ニ而道具拾寄せ候ニ付、紛れ込盜賊多有之、御役人中御製度被仰付候得共一向亂世ニ而候

(5) 享保十二年九月 定 (『田辺町大帳』以下『大帳』と略す) 田辺市立図書館藏

(6) 享保十八年十月 (『大帳』)

(7) 享保十八年七月十八日 (『大帳』)

(8) 寛文九年二月二十四日頼宣は新熊野権現へ社參、松原御飯屋に宿泊、二十五日には社頭で歌舞伎を演じさせている。寛文十年四月五日にも同様能を演じさせている。(『町大帳』)

(9) 『諸事覚帳』(『和歌山県史』近世史料(二) 二三八頁)

(10) 貞享三年二月十七日 (『大帳』)

(11) 貞享三年七月には竹本座は「佐々木先陣」(佐々木大鑑)を大坂で興行し、その珍しい趣向に観客が大いに湧いたとされ(『義太夫年表』)、田辺における興行は貞享元年からこの時期にかけての竹本座の動きとどのような関係にあったか不詳である。

(12) 貞享四年六月 (『大帳』)

(13) 享保十九年一月十四日 (『大帳』)

(14) この操芝居の一行の中には、のちに大坂で活躍した役者も含まれている。

(15) 多くの役機數の特設、あるいは大庄屋組を通じた芝居札の配分など、和歌山藩主(大殿様)の尊崇する新熊野権現に関わる興行として領主側に強く意識させた面を窺うことができる。

(16) 元文元年一月九日 (『町大帳』)

(17) 寛保三年十月 (『町大帳』)

(18) 文化十年閏十一月二日 (『町大帳』)

(19) 『記録』(一)(田所家文書)

- (20) 天保五年十二月十六日(『町大帳』)
- (21) 文政八年十一月十三日(『町大帳』)
- (22) 天保二年四月十六日(『町大帳』)
- (23) 文化八年四月二十二日(『町大帳』)
- (24) 「諸事覚帳」(『和歌山県史』近世史料(1))
- (25) 天保九年八月「町江川家数人数牛馬共書上」(『町大帳』)
- (26) 「田辺諸事控」、『御巡見衆御案内覚帳』(田所家文書 田辺市立図書館蔵)
- (27) 延宝五年二月(『町大帳』)
- (28) 「歳代記」(新宮市教育委員会蔵) 閲覧については、熊野記念館準備室山本殖生氏のご好意を得た。
- (29) 「紀州藩石橋家 家乗」(影印)
- (30) 享保十二年三月十八日、十九日(『町大帳』)
- (31) 享保十九年九月(『町大帳』)
- (32) 「長泰年譜」(『和歌山の研究』所収「和歌山略年表」中に引用)
- (33) 元文元年十二月十八日(『町大帳』)
- (34) 宝暦六年四月(『万代記』)
- (35) 宝暦十年十一月二十二日(『万代記』)
- (36) 宝暦十一年三月(『万代記』)
- (37) 明和九年九月一日(『万代記』)
- (38) 安永三年十一月四日(『万代記』)
- (39) 「在方商業の発達と町方の関係―紀州田辺領の場合―」(『社会経済史学』二〇巻三号 一九五四)
- (40) 宝暦八年九月(『町大帳』)
- (41) 安永六年十月(『町大帳』)
- (42) 貞享五年六月九日(『万代記』、『町大帳』、『田辺郷里一覽』田所家文書 田辺市立図書館蔵)

紀州田辺領における芸能興行について

- (43) 『田辺領寺社書上田辺組』（田辺市立図書館蔵）
- (44) 安永三年三月八日（『万代記』）
- (45) 安永三年四月二十八日（『万代記』）
- (46) 仙良院庚申堂は拝借米銀をしたが、返済困難に陥り、十か年間米七石宛寄付を願出、これにより作事を成就したいとした。
しかし、安永七年末には調達銀が町在に三五貫目が課されていることから考えれば、領主側が容易に寄付を出したとは考え難い。
- (47) 安永九年一月十七日（『万代記』）
- (48) 安永九年二月十六日（『万代記』）
- (49) 安永九年三月二日（『町大帳』）
- (50) 安永九年三月（『万代記』）
- (51) 安永九年八月十一日（『万代記』）
- (52) 寛政元年十月（『万代記』）
- (53) 寛政四年十一月（『万代記』）
- (54) 人数六〇人で年二回積立銀をし、寺社貸方役所に預け、その利銀で寺社の修復、あるいは難渋の寺社振救手当をするというものであった。（天保七年二月『町大帳』）

〔付記〕

田辺市立図書館所蔵史料の閲覧に際しては館長杉中浩一郎氏をはじめ職員各位のご好意を得、さらに紀南文化研究会安部弁雄氏、那須卯之助氏から種々ご教示頂いたことに感謝の意を表する。

なお本稿は昭和六〇年度佛教大学学会特別研究助成による成果の一部である。